

# 平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、病院建設工事に伴う平安宮跡・鳳瑞遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

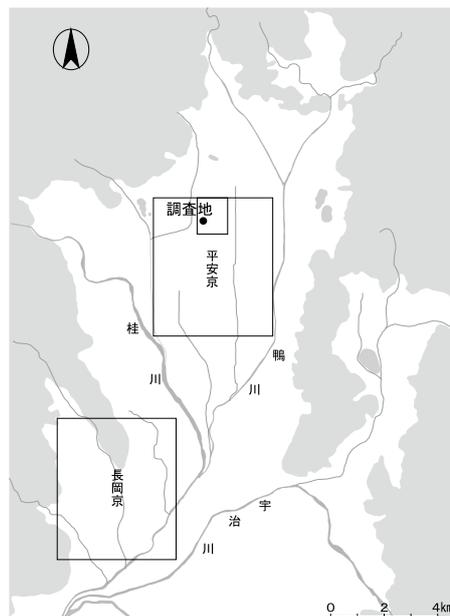
平成24年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡（文化財保護課番号 11 K 433）
- 2 調査所在地 京都市中京区聚楽廻松下町9番7号
- 3 委 託 者 株式会社竹中工務店 京都支社 支店長 長谷部 斎
- 4 調査期間 2012年3月22日～2012年5月25日
- 5 調査面積 587㎡
- 6 調査担当者 南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 南 孝雄
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・遺物整理にあたっては下記の方々から様々なご教示を頂いた。記して感謝いたします。（五十音順、敬称略）  
石田志郎、河角龍典、高 正 龍、鈴木忠司、檀原 徹、辻本裕也、中塚良、長宗繁一、西山良平、橋本義則、平尾政幸、三好孝一



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と既往の調査	2
(1) 造酒司跡の位置	2
(2) 造酒司跡の既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 層序	7
(2) 平安時代の遺構	9
(3) 室町・江戸時代の遺構	11
4 遺 物	16
(1) 土器類	16
(2) 瓦類	20
(3) その他の遺物	20
5. ま と め	21
(1) 造酒司東限築地について	21
(2) 江戸時代の調査地について	23

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（東から）
		2	2区全景（北東から）
図版2	遺構	1	柵1・2（北西から）
		2	柵2柱穴331（西から）
		3	柵2柱穴220（東から）
図版3	遺構	1	溝110（北から）
		2	溝110土器出土状況（北西から）
		3	土坑84土器出土状況（北東から）
		4	土坑186断面（南から）
図版4	遺構	1	土坑100土器出土状況（南東から）
		2	土坑293（北から）
		3	土坑92（北から）

- 4 土坑92遺物出土状況（北から）
- 図版5 遺構 1 溝69（東から）  
 2 溝112（北から）  
 3 溝135（南から）  
 4 火山灰層断面（南から）
- 図版6 遺物 土器
- 図版7 遺物 土器・瓦・土製品・金属製品・石製品

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	調査前全景（北東から）	2
図4	調査風景（北西から）	2
図5	平安京域の地形分類図	3
図6	造酒司跡遺構配置図（1：1000）	3
図7	2区断割断面図（1：50）	6
図8	火山ガラス顕微鏡写真	6
図9	1区西壁・2区南半西壁断面図（1：60）	7
図10	遺構平面図（1：200）	8
図11	柵2実測図（1：60）	9
図12	土坑84・186、溝110実測図（1：30、1：50）	10
図13	柵1実測図（1：60）	12
図14	土坑92・100・293実測図（1：20）	13
図15	遺構断面図（1：50）	14
図16	土坑84・186、溝110出土土器実測図（1：4）	17
図17	土坑36・81・92・100・213・295、溝135出土土器実測図（1：4）	18
図18	瓦拓影・実測図（1：4）	19
図19	土製品・金属製品・石製品実測図（1：4）	20
図20	造酒司跡遺構平面図（1：800）	22
図21	『宮城図』に記された宮内道路の中員	23
図22	『改正京町絵図細見大成』に記された調査地周辺	23
図23	3次調査 溝135南延長部と石組暗渠（北から）	24

# 表 目 次

表 1	造酒司跡調查一覽表 .....	4
表 2	遺構概要表 .....	11
表 3	遺物概要表 .....	16
表 4	土坑84出土土器類構成表 .....	18



# 平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡

## 1. 調査経過

今回の調査は、洛和会丸太町病院の病棟建設に伴い行ったものである。調査地は平安宮造酒司跡にあたる。造酒司跡で行われる発掘調査は今回で8次調査となる。調査地には、京都市休日診療所および京都市丸太町寮が存在したが、これらの施設が平成23年度をもって廃止され、この跡地に洛和会丸太町病院が移転する事が計画され、発掘調査が行われる事となった。発掘調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって試掘調査が実施された。この結果、病棟計画地の西半部に平安時代の遺構面が確認されたが、東半部は近世の土取り穴によって遺構面が失われており、調査区はそれを除外する範囲に決定された。

発掘調査は調査区を南北2つに分割して行った。調査の開始段階において、既存建物の解体工事が調査区南側で行われており、調査区の南部ではこれと接する部分が存在した。このため、安全上の理由から調査区を北半部の1区と南半部の2区とに分け、1区から調査を開始し、解体工事の終了後に2区の調査を行った。2区の調査では、調査区西側で平安時代の南北方向の柱列を検出し、これが柵あるいは建物として西側に柱穴が続くかを確認するため、一部調査区の拡張を行った。こ



図1 調査位置図 (1 : 5,000)

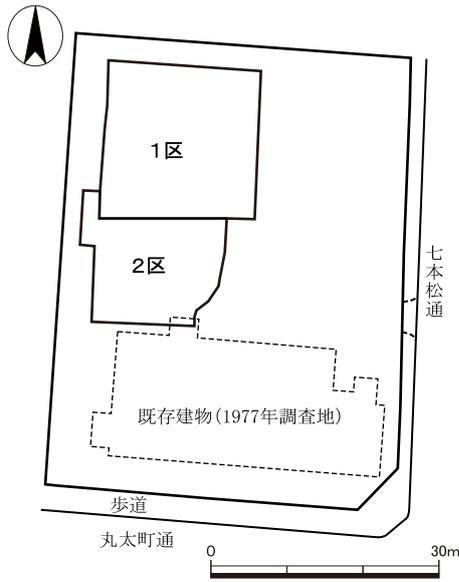


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

の結果、柱穴はこの西側では検出されず柵である事が確定した。

調査の結果、平安時代前期の柵の他に、造酒司東限築地の内溝や土坑などを確認した。また、江戸時代の遺構・遺物を検出しており、これらは信州上田藩の藩邸と関連する可能性が考えられる。また、平安時代の遺構面を形成する地山層（明黄褐色砂泥層、いわゆる聚楽土）の約2m下層で始良T.N火山灰層が検出されている。

1区の調査は、平成24年3月22日から開始し5月7日に終了。2区の調査は5月7日に開始し5月25日に終了した。調査終了後の6月2日には、病院関係者および地元住民を対象にした現地説明会を実施し、約80名の参加者を得た。

## 2. 位置と既往の調査

### (1) 造酒司跡の位置 (図5)

平安京は、京都盆地北部の標高19～59mの北東から南西に下がる緩傾斜地に位置し、東西4.5km、南北5.7kmの規模を持つ。この傾斜地は、平安京の東西を挟む鴨川・桂川をはじめ京域内を流れる天神川などの河川による複数の扇状地によって形成されている<sup>1)</sup>。平安京域は地形分類としては、段丘面Ⅰ、段丘面Ⅱ、段丘面Ⅲ、段丘面Ⅳ、現氾濫原の大きく5面に分類されている<sup>2)</sup>。この中で平安宮は、一部に段丘面Ⅱや紙屋川の扇状地が含まれるが、ほとんどが段丘面Ⅰにあり、標高37～58mの安定した地形にある事がわかる。造酒司はこの平安宮の中では中央部の西より位置の段丘面Ⅰの先端部に近い地点に位置している。



図3 調査前全景 (北東から)



図4 調査風景 (北西から)

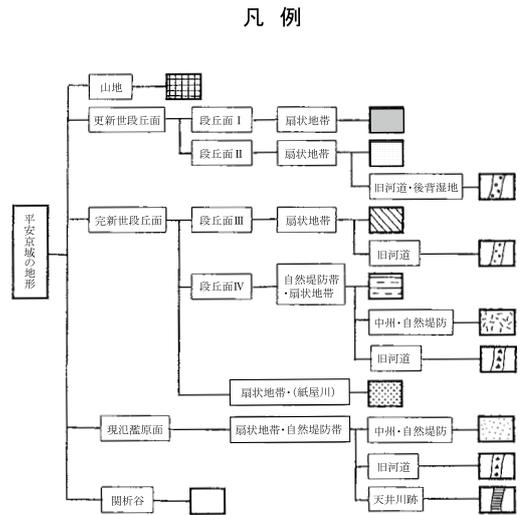
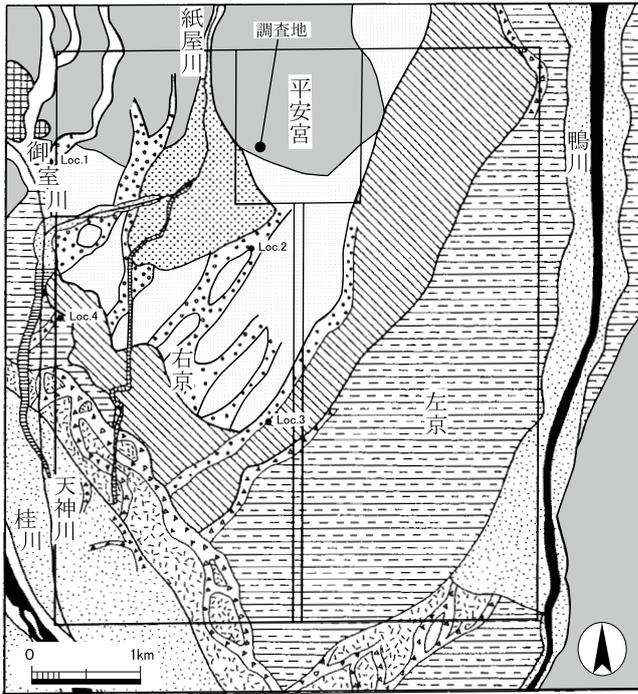


図5 平安京城の地形分類図 (註2河角論文より 一部改変)

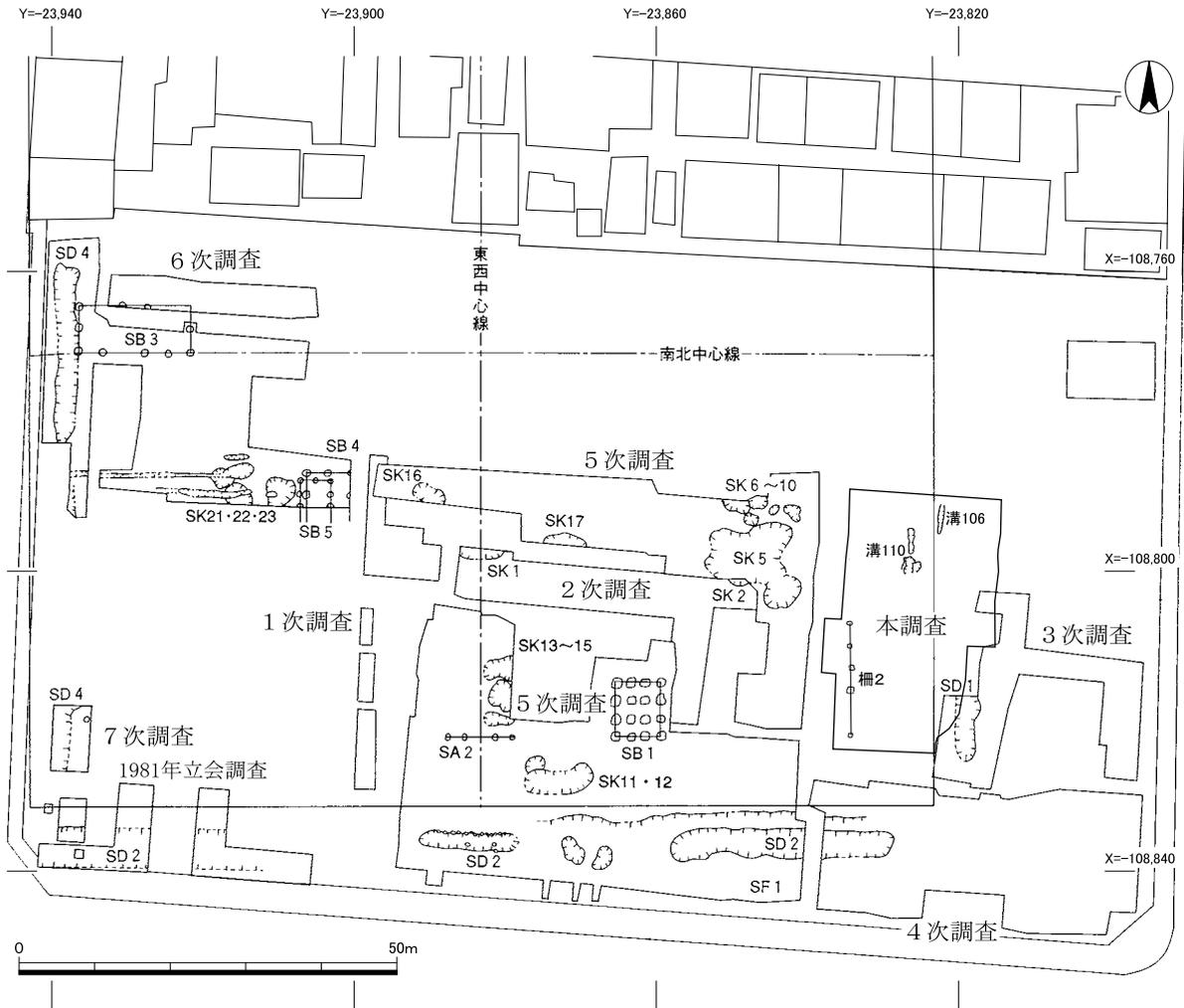


図6 造酒司跡遺構配置図 (1 : 1,000)

## (2) 造酒司跡の既往の調査 (図6、表1)

造酒司跡では、これまで7次にわたる調査が実施されており、今回は8次調査となる。これまでの調査面積は合わせて約5,600㎡となり、平安宮の中では最も調査が進んでいる官衙である。発掘調査はすべて造酒司跡の南半部で行われているが、これはこの部分が長く京都市の土地であり、社会教育センター(京都アスニー)や保育園、休日診療所など公共施設の建設とこれに伴う発掘調査が行われてきたことによる。

以下に調査回数ごとに調査成果の概要を述べる。なお調査主体は、1次調査は京都市文化財保護課が、2次から7次調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所が行っている<sup>3)</sup>。

**1次調査** この調査では、平安時代の造酒司に関連する遺構は検出されなかった。主な遺構としては江戸時代の大溝がある。溝は東から北へL字型に折れ曲がり、幅1.5～2.5m、深さ1.8mを測る。溝の方位は北に対して大きく東に振っている。溝の性格は不明である。

**2次調査** 造酒司跡の南半中央部で行われた調査である。平安時代の土坑が検出されている。

**3次調査** 造酒司跡の南西部で行われた調査である。造酒司の東限築地の外溝(SD1)が検出された。この溝は、江戸時代の石組暗渠を伴う溝によって西半が失われているが、検出幅で幅1.5～2.0mを測る。SD1からは平安時代前期の遺物が出土している。

表1 造酒司跡調査一覧表

調査回数	調査期間	調査面積	遺構	報告書名
1	1974/09～ 1974/10	425㎡	江戸時代：溝。	梶川敏夫「造酒司跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-I』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
2	1977/01/25～ 1977/02/05	279㎡	平安時代：土壇。 室町時代：溝状遺構。 江戸時代：柱穴群、土壇。	本 弥八郎「平安宮造酒司跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1977-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年 『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
3	1977/02/04～ 1977/03/04	285㎡	平安時代：造酒司東限築地外溝。 室町・江戸時代：溝、柱穴列、瓦溜、土壇。	本 弥八郎「平安宮造酒司跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1977-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年 『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
4	1977/11/20～ 1977/12/27	800㎡	平安時代：造酒司南限築地外溝。 室町時代：溝。 江戸時代：柱穴。	『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
5	1978/03/02～ 1978/05/31	2700㎡	平安時代：掘立柱建物(倉庫)、 柵、土坑、造酒司南限築地外溝。	『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
6	1978/10/02～ 1978/11/25	1100㎡	平安時代：掘立柱建物3棟、 造酒司西限築地内溝。 近世：溝、柱穴多数。	『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
7	1979/05/24～ 1979/06/08	74㎡	平安時代：造酒司西限築地内溝、 造酒司南限築地外溝。	『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
8	2012/03/12～ 2012/05/25	587㎡	平安時代：掘立柱建物(倉庫)、 柵、土坑、造酒司東限築地内溝。	本報告

※ 上記の発掘調査の他に、水道管・ガス管の埋設に伴う立会調査などがある。

**4次調査** 造酒司跡の南東隅部で行われた調査である。造酒司の南限築地の外溝（SD2）と南限築地推定位置で築地状の地山の高まりが検出された。SD2は幅3.9m、深さ0.5mを測る。また、平安時代以外の遺構として平安時代以前の溝や江戸時代の掘立柱建物などがある。

**5次調査** 造酒司跡の南半中央部で行われた調査である。平安時代前期の掘立柱倉庫（SB1）、柵（SA2）、南限築地の外溝（SD2）と南限築地推定位置で築地状の地山の高まりが検出された。SD2の造酒司東西中心線の延長線上では、築地外溝にかかる橋が検出されている。橋は柱穴4基からなり、柱穴は径0.5m前後、柱間は東西約4.0m、南北2.0を測る。SD2は、この橋のかかる部分にのみ杭による護岸が施されている。出土遺物は、SB1、SD2ともに9世紀前半の土器類などがある。SB1の柱跡は、京都アスニーの屋外広場でタイルによって明示している。

**6次調査** 造酒司跡の南北中心の西端で行われた調査である。造酒司の西限築地の内溝（SD4）と掘立柱建物3棟（SB3～5）と溝、土坑などが検出された。SD4は幅3m、深さ0.5mを測る。SB3は5間×2間の掘立柱建物で、SD4の埋没後に建てられている。SD4からは9世紀前半の土器類などが出土している。

**7次調査** 造酒司跡の南西隅部で行われた調査である。造酒司の南限築地の外溝（SD2）と西限築地内溝（SD4）が検出された。SD2とSD4は交わらない事が確認されている。

以上のように、これまでの造酒司跡の調査では、掘立柱建物、柵、築地状の高まり、築地に伴う溝、土坑などが検出されている。外郭を区画する遺構として築地に伴う溝が、北限築地以外の3辺で検出されている。南限築地外溝のSD2は幅3.9m、西限築地内溝のSD2は幅3.0m、東限築地外溝のSD1は遺存幅で1.0mを測り、それぞれに規模が大きく、それぞれが9世紀の前半に埋没する事も共通する。

#### 註

- 1) 石田志郎「京都盆地北の扇状地－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』34巻－12号 1984年
- 2) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年
- 3) 各次調査で記す遺構名は、以下の報告による。ただし、調査次数は京都市文化財保護課の1974年調査を1次調査として追加したため、以下の報告より1次増えている。

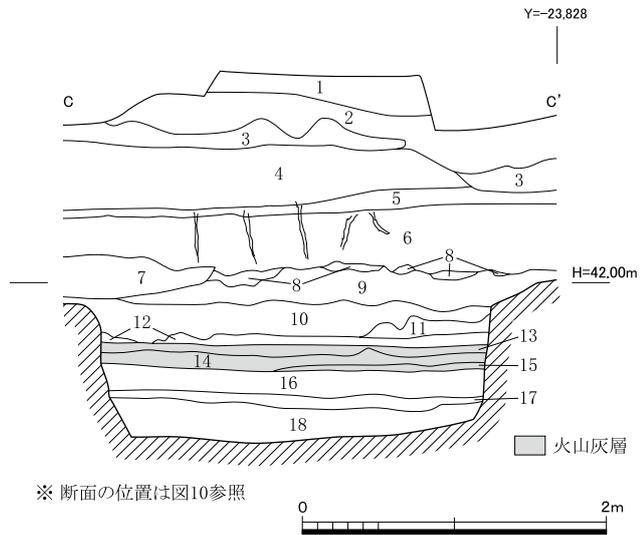
『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年

### 3. 遺 構

#### (1) 層序 (図7～9、図版5)

調査地の現地表面は44.6～44.2mで北西に高く南東に低くなっている。現地表面下約1mまでが現代の盛土で、この下が江戸時代の耕作土や整地層となっている。遺構はすべて地山面で検出している。地山面も現状地形同様に北西に高く南東に低くなっている。

地山を形成する層は明褐色砂泥層（いわゆる聚楽土）を基本とする。2区の攪乱土坑壁面での断面観察の結果、この明褐色砂泥層と同質の土層が平安時代の遺構面より下約2m堆積し、この下層において火山灰層が確認された。火山灰の含まれる層は数層確認されている。図7はこの堆積を示したものである。10～12層は極細砂および細砂に火山灰層が含まれるもの、13～15層が火山灰層である。分析の結果、<sup>1)</sup>13・14層は始良T.N火山灰層で、13層は14層よりも重鉍物組成が少ない事から再堆積層の可能性が考えられる。15層は始良T.N火山灰の噴火直前の大隅降下軽石（A-Os）とみられる。



- 1 10YR7/6 明黄褐色極細砂～細砂 (平安時代遺構面)
- 2 10YR6/8 明黄褐色極細砂～細砂
- 3 10YR3/3 暗褐色礫 φ0.5～3cm・5cm大含む
- 4 10YR5/8 黄褐色極細砂混シルト
- 5 10YR2/3 黒褐色マンガン沈着
- 6 10YR6/8 明黄褐色シルト極細砂混、ひび割れ顕著
- 7 10YR6/3 にぶい黄橙色 φ0.5～2cm礫・φ5cm礫
- 8 2.5Y7/3 浅黄色シルト極細砂少量 (土壌化層)
- 9 10YR6/6 明黄褐色シルト極細砂少量 (土壌化層)
- 10 10YR5/8 黄褐色シルト極細砂、火山灰混
- 11 2.5Y7/2 灰黄色極細砂シルト混、火山灰混
- 12 10YR7/4 にぶい橙色細砂シルト混、火山灰混
- 13 10YR6/6 明黄褐色シルト極細砂混、やや粘質 (火山灰)
- 14 10YR6/3 にぶい黄橙色極細砂シルト混 (火山灰)
- 15 10YR6/8 明黄褐色細砂 (火山灰)
- 16 10YR4/6 褐色粘土、φ3cm礫少量混
- 17 10YR5/6 黄褐色粘土極細砂少量混
- 18 7.5YR4/6 褐色粘土極細砂少量混、固く締まる

図7 2区断割断面図 (1:50)

#### (2) 平安時代の遺構 (図10～12・15、図版1～3)

平安時代の遺構には柵、土坑、溝などがある。溝には造酒司東限築地の内溝がある。時期的にはすべて9世紀の前半である。

遺構はすべて地山面で検出しているが、遺構の遺存状況は総じて悪く、柱穴は浅く、溝も部分的にしか検出できなかった。地山の直上には近世の耕作土や整地層が存在する事から、主にこの時期に土地の削平を受けた結果、平安時代の遺構の遺存状況が悪くなったものと考えられる。

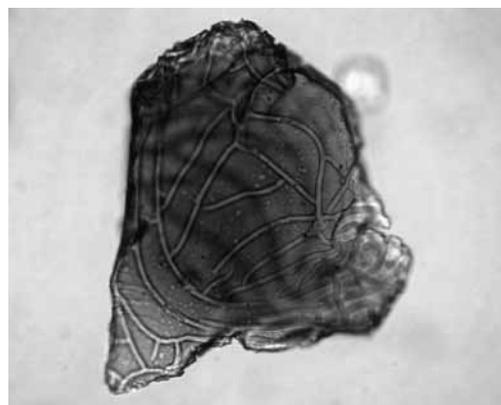
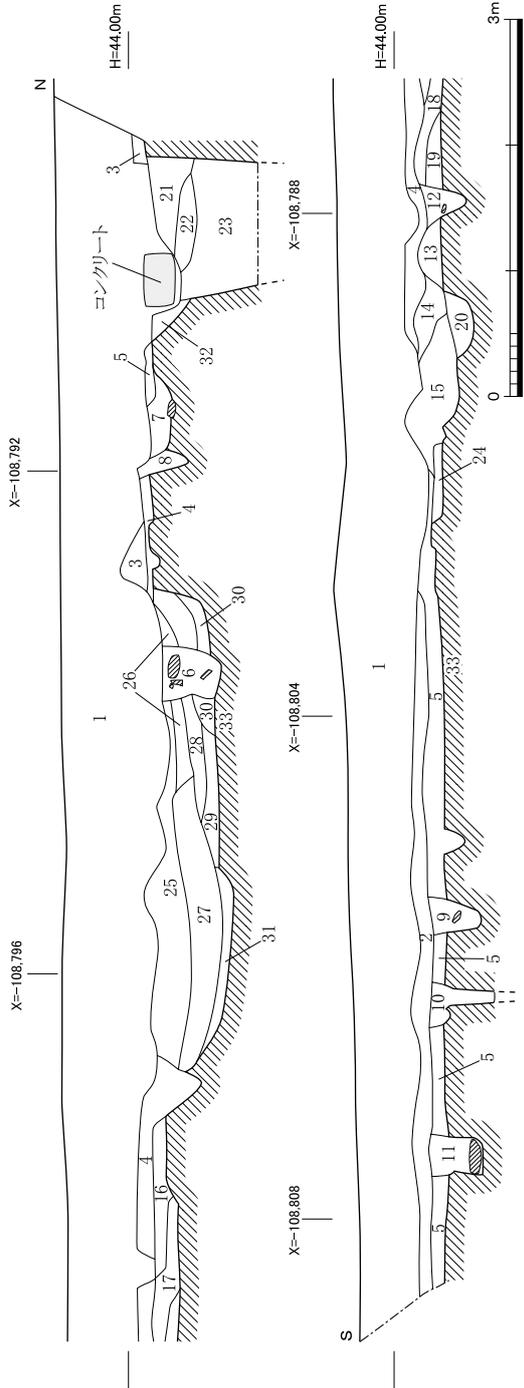


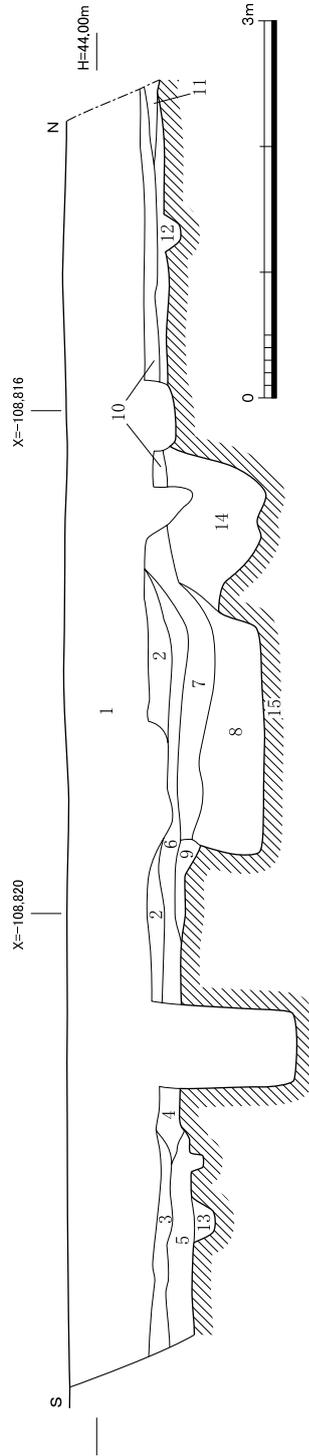
図8 火山ガラス顕微鏡写真

1 区西壁



- |                                     |                             |                            |                       |
|-------------------------------------|-----------------------------|----------------------------|-----------------------|
| 1 盛土                                | 9 2.5YR4/3 オリーブ褐色砂泥         | 17 2.5Y6/3 にぶい、黄色砂礫層       | 26 7.5YR3/2 黒褐色砂泥     |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(近世耕作土)             | 10 10YR4/4 褐色砂泥、φ2~15cmの礫泥  | 18 2.5Y5/6 黄褐色砂泥(近世整地層)    | 27 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥     |
| 3 10YR4/4 褐色砂泥                      | 11 2.5YR6/4 にぶい、黄色砂泥        | 19 2.5Y6/3 にぶい、黄色砂礫層       | 28 10YR4/2 にぶい、黄褐色砂泥  |
| 4 10YR4/4 褐色砂泥、φ2~15cmの礫泥(近世~近代耕作土) | 12 2.5Y6/6 明黄褐色砂礫層          | 20 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂泥       | 29 10YR2/3 黒褐色砂泥      |
| 5 10YR5/3 にぶい、黄褐色砂泥(床土か)            | 13 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥         | 21 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂泥(井戸98) | 30 10YR5/4 にぶい、黄褐色砂泥  |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥                     | 14 10YR3/4 暗褐色砂泥            | 22 2.5YR4/3 オリーブ褐色砂礫(井戸98) | 31 10YR3/3 暗褐色砂泥 粘質   |
| 7 10YR2/3 黒褐色砂泥                     | 15 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、φ2~5cmの礫泥 | 23 10YR3/3 暗褐色砂泥(井戸98)     | 32 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 |
| 8 10YR4/4 褐色砂泥                      | 16 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂泥        | 24 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥        | 33 10YR7/6 明黄褐色砂泥(地山) |

2 区南半西壁



- |                     |                                   |                                |                       |
|---------------------|-----------------------------------|--------------------------------|-----------------------|
| 1 盛土                | 5 10YR4/4 褐色砂泥 固く締まる              | 9 10YR8/4 浅黄橙色砂泥 やや粘質          | 13 10YR7/8 黄橙色砂泥      |
| 2 10YR7/2 にぶい、黄橙色砂泥 | 6 10YR6/4 にぶい、黄褐色砂泥               | 10 10YR5/3 にぶい、黄褐色砂泥 やや粘質、土器含む | 14 10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質   |
| 3 10YR4/6 褐色砂泥      | 7 10YR5/3 にぶい、黄褐色砂泥 やや粘質          | 11 10YR6/3 にぶい、黄褐色砂泥 やや粘質      | 15 10YR7/6 明黄褐色砂泥(地山) |
| 4 2.5Y7/6 明黄褐色砂泥    | 8 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質、瓦・土器含む(土坑213) | 12 10YR7/4 にぶい、黄褐色砂泥 やや粘質      |                       |

図9 1区西壁・2区南半西壁断面図(1:60)

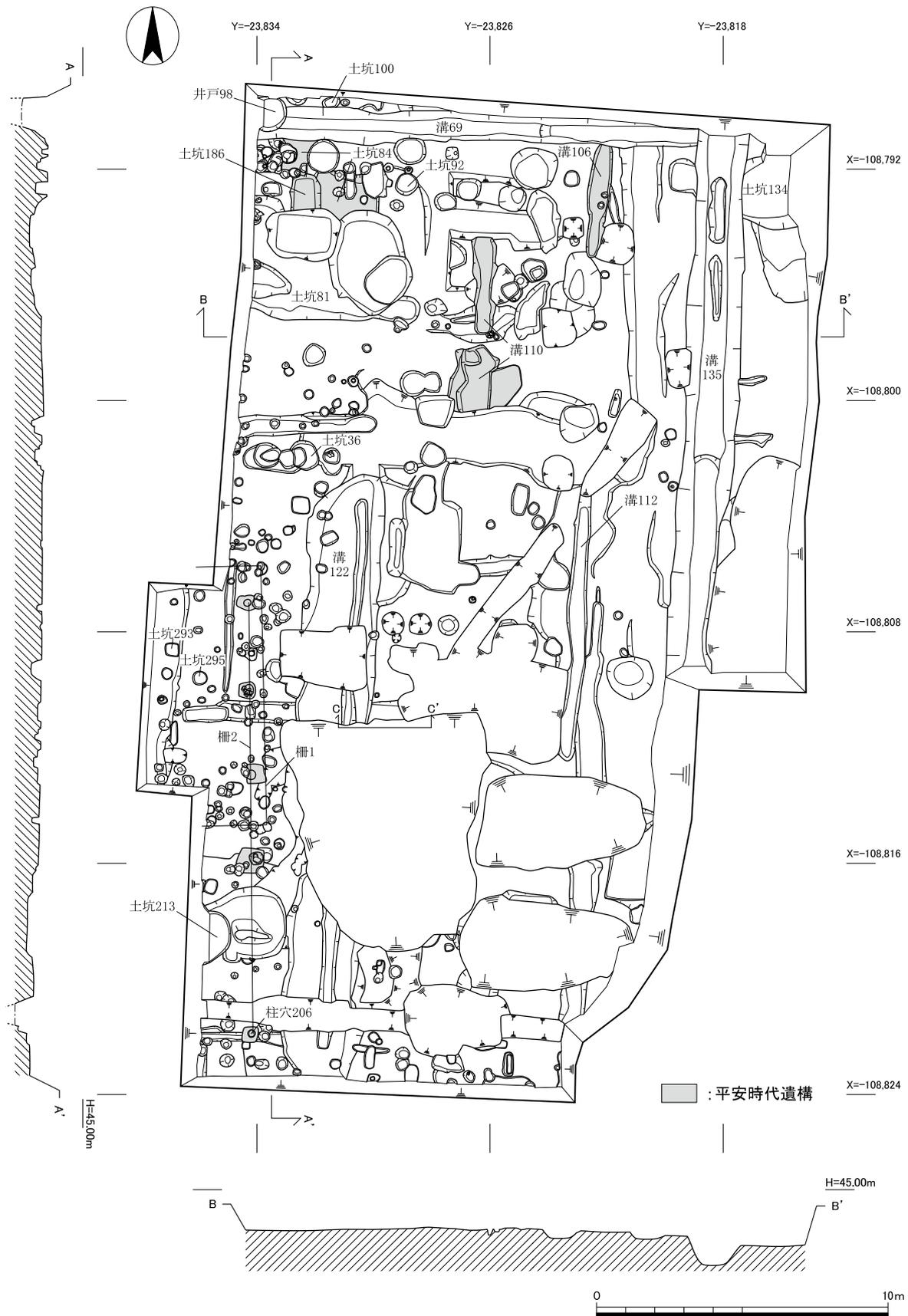


図10 遺構平面図 (1 : 200)

柵2 (図11、図版2) 1区から2区にまたがって調査区の西側で検出した、南北方向の柵。南北15mの5間と推測され、柱間は3mを測る。柱掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.6~1.0m、深さは0.15~0.35m、柱痕は0.3mを測る。南から2つ目の柱穴は検出できなかったが、その位置には近世の土坑が存在しており、これによって失われた可能性が高い。柱穴331では、径0.3m程の砂岩、凝灰岩などを使用した礎石を検出した。この礎石の下層で柱痕跡を確認しており、礎石は柱の根腐れなどに対応した二次的なものとみられる。小片のために図示はできないが、柱掘形の埋土上層から平安京・京都土器編年I期新<sup>2)</sup>の土師器皿が出土している。また、柱穴220の掘形底部からは長岡宮式の軒平瓦が出土している。

土坑84 (図12、図版3) 1区北西部で検出した土坑。東西3.3m、南北は2.4mを測るが、北側と南側が溝69と土坑81によって失われているため、本来の規模は不明である。平面形は北西部が張り出す不成形な方形である。埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂泥であり、平安京・京都土器編年I期中の土器類が出土した。

土坑186 (図12、図版3) 1区北西部、土坑84の下層で検出した土坑。東西1.0m、南北は1.3mを測るが、南側を土坑81によって失われているため、本来の規模は不明である。埋土は炭化物を多く含む黒褐色砂泥であり、平安京・京都土器編年I期中の土器類が出土した。

溝106 (図15) 1区北東部で検出した南北方向の溝。幅0.7m、深さ0.2m、南北長は3.9mを測るが、北側は溝69によって、南側は後世の削平によって失われたものとみられる。埋土は明黄褐色砂泥ブロックを含む暗褐色砂泥である。遺物の出土がなく時期は確定できないが、

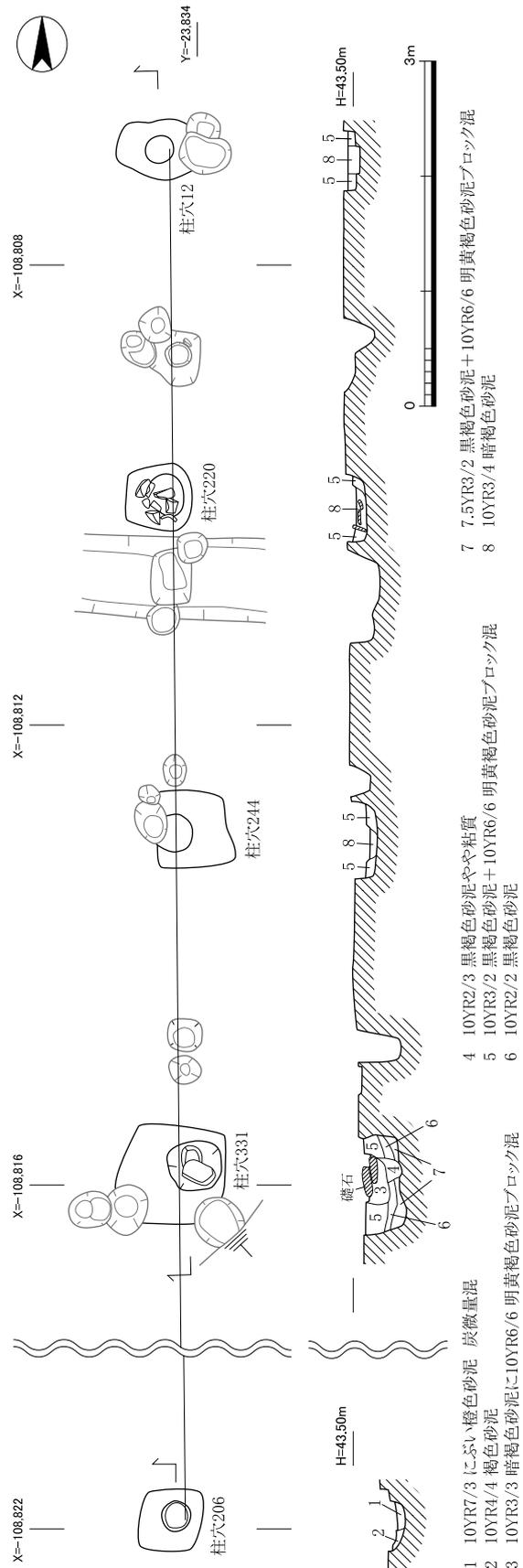
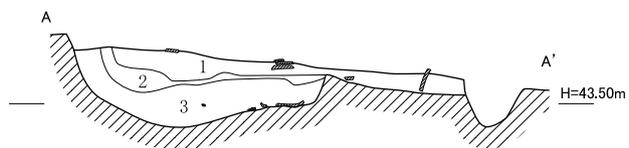
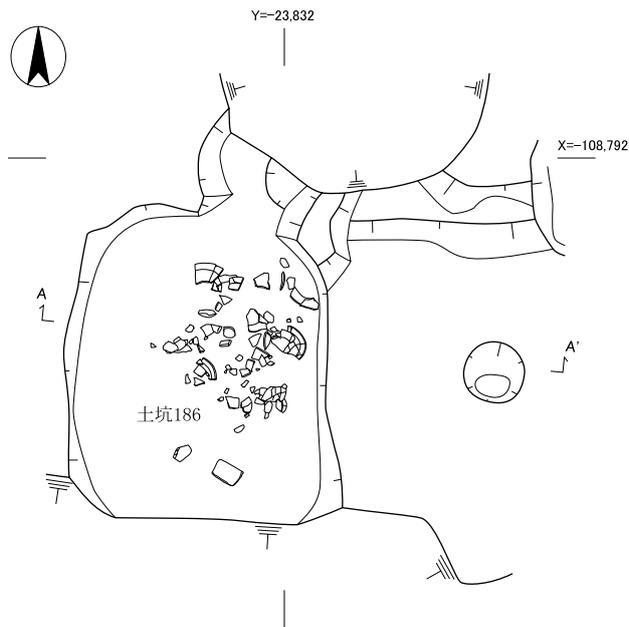
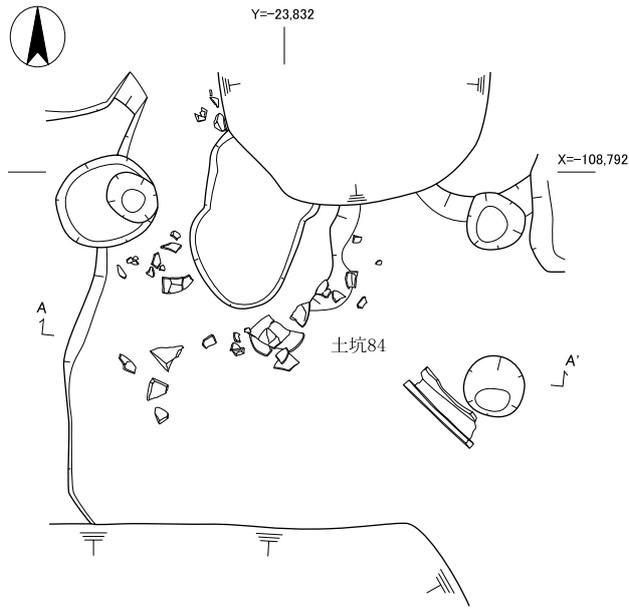


図11 柵2実測図 (1:60)

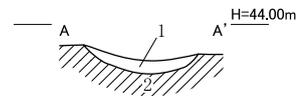
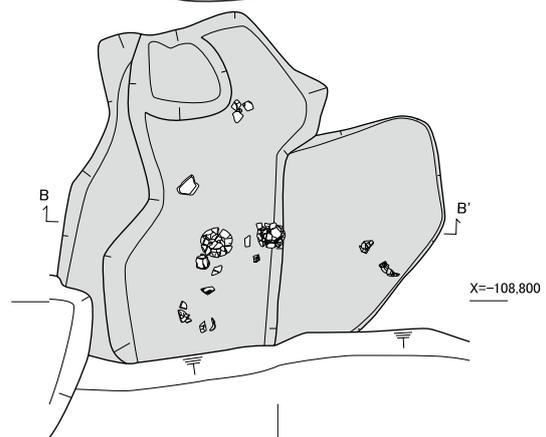
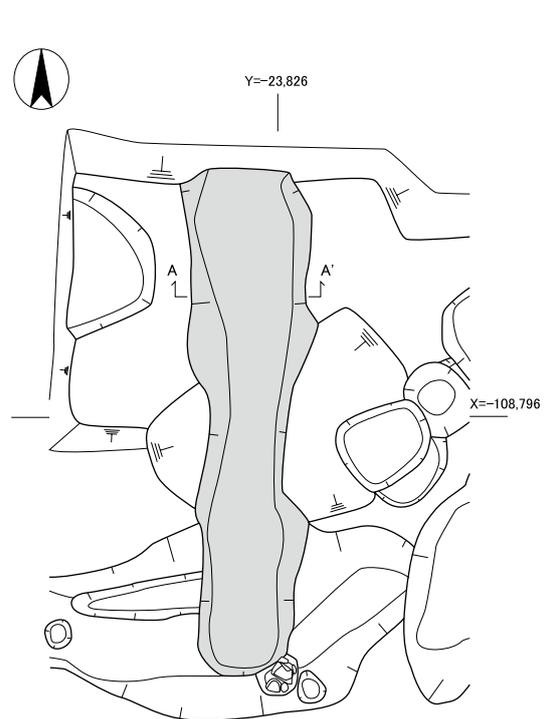
土坑84・186



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、粘質、土器多量・φ1~4cm礫含む(土坑84)
- 2 10YR7/8 黄橙色砂泥(土坑186)
- 3 10YR2/3 黒褐色泥砂、粘質、土器多量含む(土坑186)



溝110



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、炭少量含む
- 2 10YR7/6 明黄褐色砂泥、φ1~3cm礫含む



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、やや粘質+
- 2.5Y8/4 浅黄色砂泥ブロック混



図12 土坑84・186、溝110実測図 (1:30、1:50)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	柵2、柱穴276、土坑84・186、溝106・110	
室町時代	溝69・112	
江戸時代	井戸98、土坑36・81・92・100・134・213、溝69・112・135	

埋土が他の平安時代の遺構と近い事から、平安時代前後の遺構とする。

**溝110** (図12、図版3) 1区中央部で検出した造酒司東限築地の内溝と考えられる南北方向の溝。幅0.3~0.7m、深さ0.1~0.2m、南北長は6.0mを測るが、南北両側ともに後世の削平によって失われている。溝底のレベルは一定ではなく、中央やや南側で途切れる部分がある。後世の削平によって溝の最も深い部分のみが残ったとみられる。南半部で、溝幅は広がりこの部分で土器がまとまって出土した。埋土は浅黄色砂泥ブロックを含む暗褐色砂泥である。土器の時期は平安京・京都土器編年I期中である。

### (3) 室町・江戸時代の遺構 (図10・13~15、図版1・2・4・5)

今回の調査で検出された遺構は340基に上るが、そのうちの約300基が江戸時代のものである。江戸時代の遺構には柱穴・土坑・井戸・溝などがあり、その多くは1・2区ともに西側に分布する。時期的には17世紀代のものもあるが、18~19世紀のものが多い。室町時代の遺構には1区の北壁際で検出した溝69と1区から2区にかけて検出した溝112がある。

**柵1** (図13、図版2) 1区から2区にまたがって調査区の西側で検出した掘立柱の柵である。柱掘形の平面形は楕円形を呈し径0.25~0.45m、深さは0.15~0.35mを測る。柱間は不等間で0.7~1.1mを測る。柱列はコの字形を呈する。柱掘形の埋土からは棧瓦片が出土した。

**井戸98** 1区北西隅部で検出した平面形が円形を呈する井戸である。径1.2mを測る。検出面から1.2mまで掘り下げたが底面に達しなかった。検出位置が調査区壁際であり、崩落の危険性を配慮し、底面の確認は調査の最終段階で重機によって行った。この結果、検出面より約2.2m下の標高41mで底面に達し、湧水が確認された。井戸下層より江戸時代後半の陶磁器類小片が出土した。

**土坑36** (図15) 1区西部で検出した土坑。直径約1.0m、深さ0.2mを測り、平面形は円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥である。平安京・京都土器編年Ⅷ期の土器類が出土した。

**土坑81** 1区西壁際で検出した土坑。南北約4m、東西5m以上を測り、西側は調査区外へと続く。平面形が不成形な土坑。埋土は、最下層に粘性を帯びた暗褐色砂泥層が薄く堆積し、その上層に黄褐色砂泥層などが堆積する。平安京・京都土器編年Ⅹ期中が出土した。形状や堆積状況などから土取りを行った土坑と考えられる。

**土坑92** (図14、図版4) 1区北西部で検出した土坑。直径約0.8m、深さ0.15mを測り、平面形は円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。埋土は褐色砂泥層。土坑底面近くで土師器皿が3点、

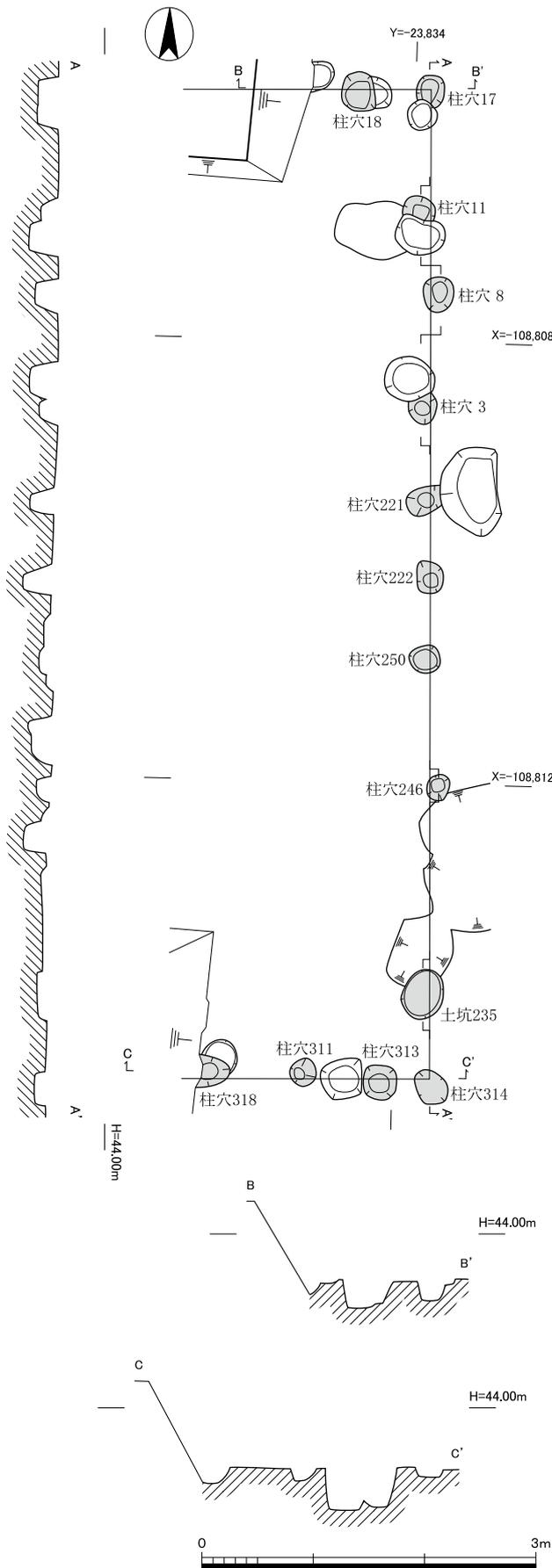


図13 柵1実測図 (1:60)

銅製の鑷子（ピンセット）が出土した。廃棄土坑とは考え難く、墓の可能性もあるが性格は不明である。

**土坑100**（図14、図版4） 1区北西部の北壁際で検出した土坑。東西0.65mを測る。南側は溝96によって失われ、北側は調査区外へと続くために南北規模は不明である。土坑内より土師器の壺が正位置で出土した。土坑中央の底面は壺を据え付けるために掘り下げている。遺構の性格としては胞壺や墓の可能性が考えられる。

**土坑134**（図15） 1区北東部で検出した土坑。南北5m以上、東西2m以上、深さ0.8mを測る。北側と東側は調査区外へと続くために規模は不明である。西壁面は抉るように掘られている。土取り穴の可能性が高い。いずれも小片のために図化していないが、18世紀代の土器類と棧瓦が出土している。

**土坑213** 2区西壁際で検出した土坑。南北1.8m、東西0.8m以上を測り、西側は調査区外へと続く。土坑内から土器類とともに多量の瓦類が出土した。出土した土器類の年代は平安京・京都土器編年ⅩⅢ期である。

**土坑293**（図14、図版4） 2区北西部で検出した土坑。径0.5m、深さ0.1m、平面形は円形を呈する。平安京・京都土器編年ⅩⅢ期の土器類が出土した。

**土坑295**（図15） 2区西壁際で検出した土坑。一辺約0.4m、深さ0.2mを測り、平面形は方形を呈する。土坑内には0.1～0.2mの礫、土器、瓦類が充填されていた。遺構の性格として排水枡の可能性が考え

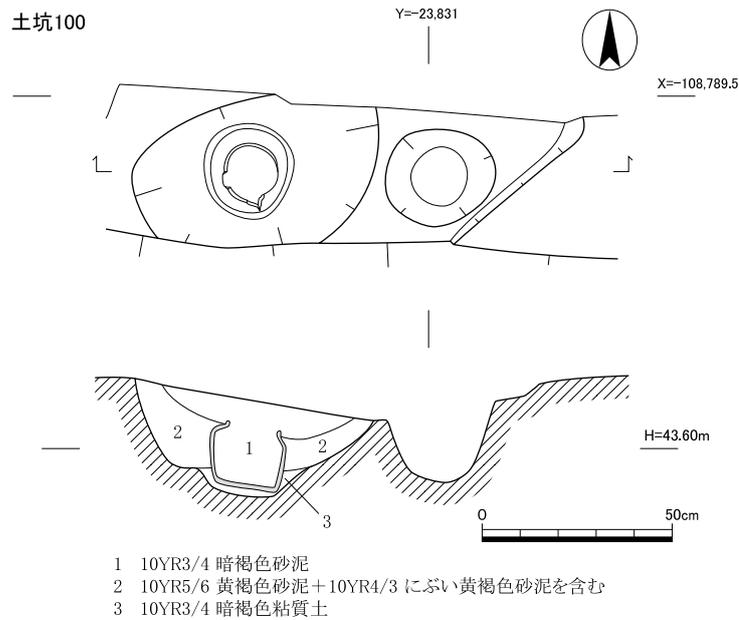
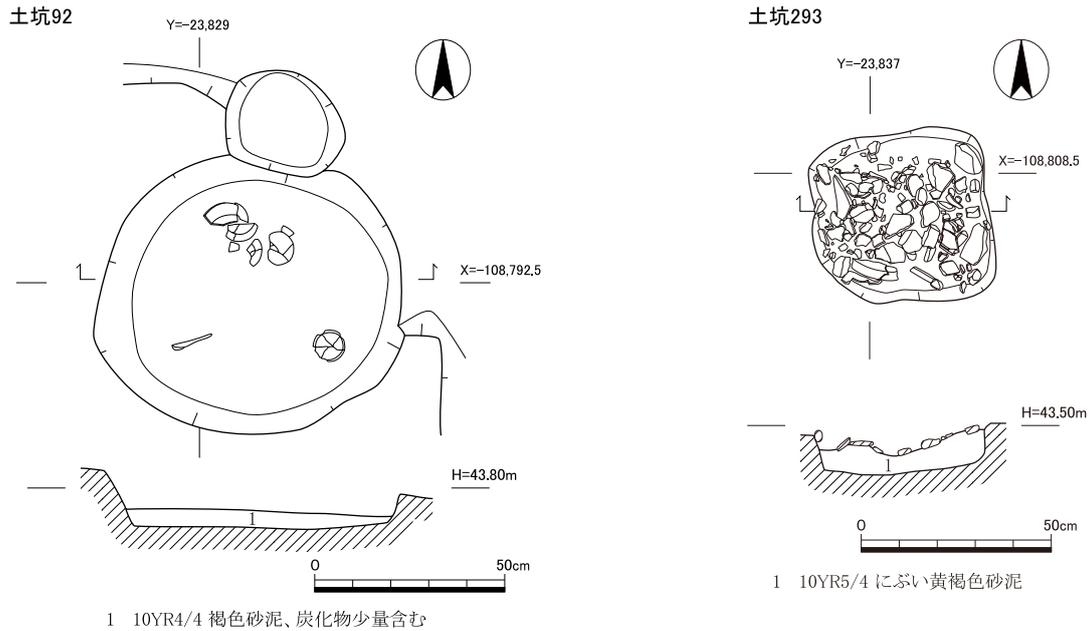
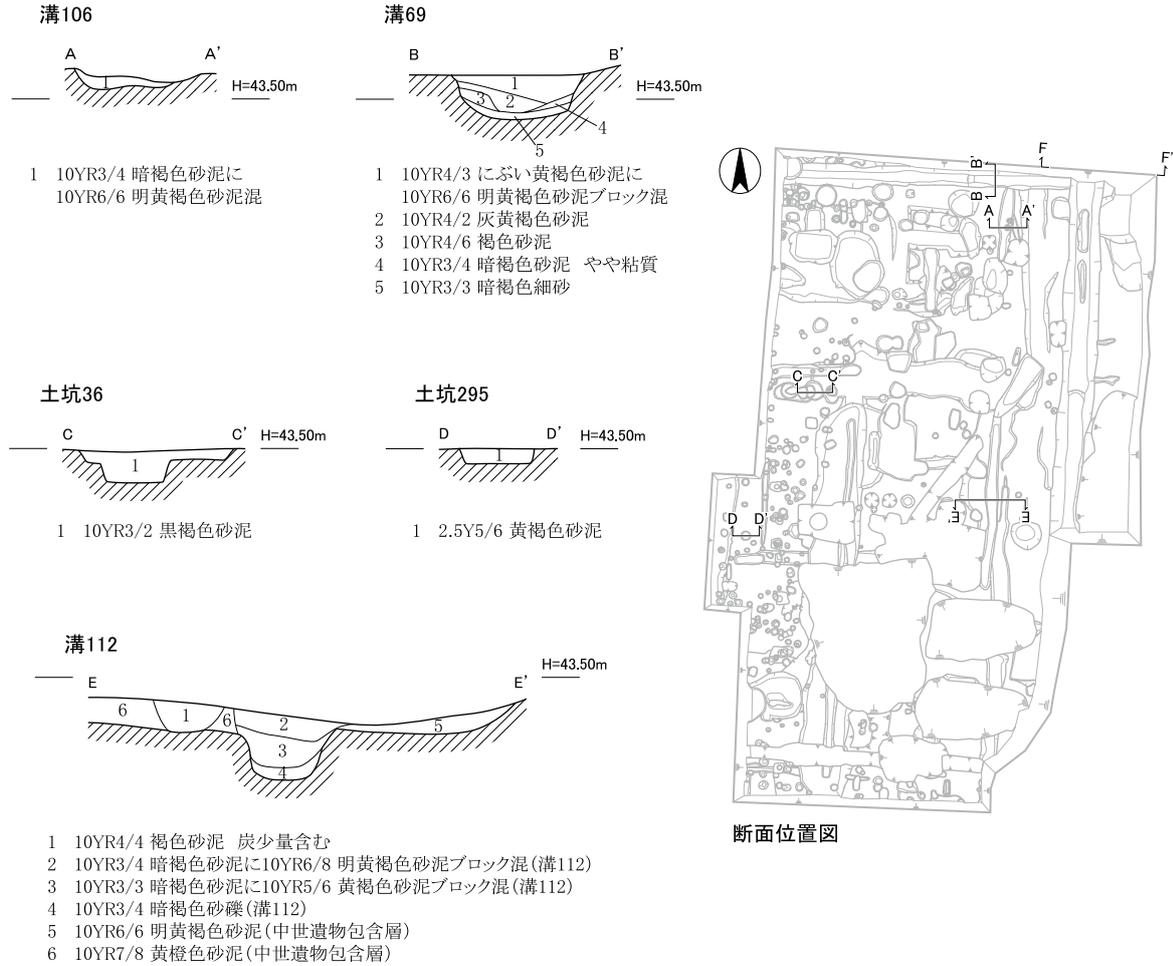


図14 土坑92・100・293実測図（1：20）

られる。出土した土器類の年代は平安京・京都土器編年Ⅲ期である。

**溝69**（図15、図版5） 1区北壁際で検出した東西方向の溝。幅1.2m、深さ0.3m、東西長は15m以上を測り、西側は調査区外へと続き、東側は溝135より東には延びない。溝の底面は西から東側へと低く、西端で標高44.2m、東端で標高44.1mとなる。溝内からの遺物の出土は少なく、小片のために図示できないが、15世紀代の龍泉窯の青磁などがある。

**溝112**（図15、図版5） 2区西部で検出した南北方向の溝。幅0.7m、深さ0.4m、南北長は約9mを測る。溝の底面は、南北で勾配がなくほぼ水平である。溝内からは室町時代の土師器皿の小片が少量出土する。溝の検出位置は平安時代の造酒司東限築地推定ラインに近く、この溝の西側で



**溝135・土坑134**

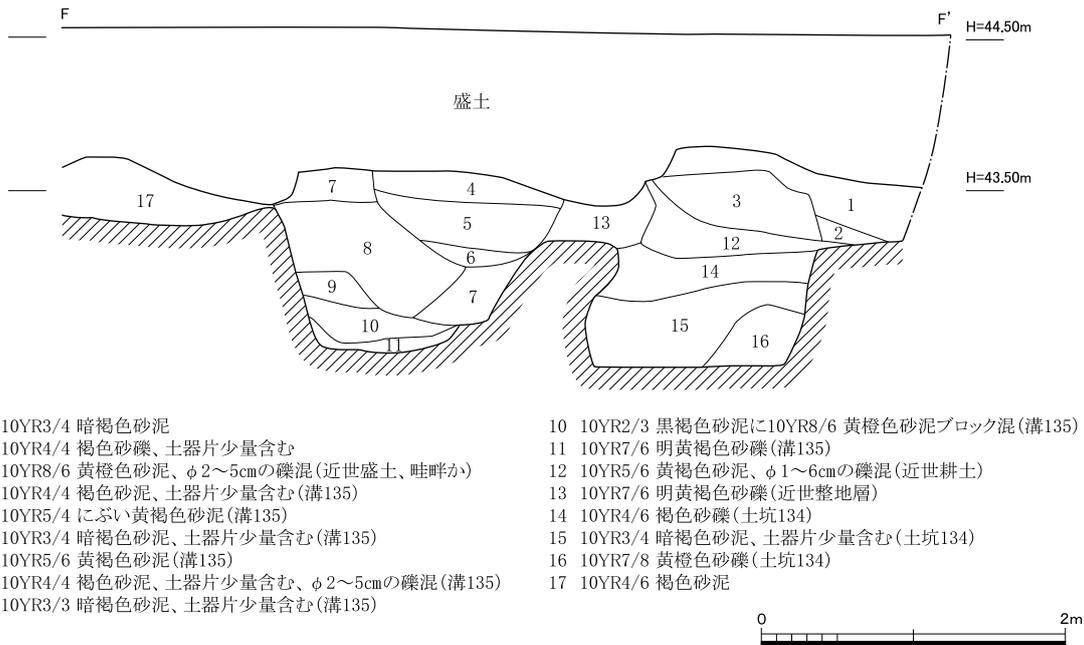


図15 遺構断面図 (1:50)

遺構面が一段高くなっている。これらの事から、中世に周辺が耕作地となった段階で、平安時代の区画を踏襲して掘削された畔際の溝の可能性が考えられる。

**溝122** 1・2区の西部で検出した南北方向の溝。幅約2.5m、深さ0.2～0.3m、南北長は20m以上を測るが、南側は調査区外へと続く。溝底は北から南へと低くなっており、北端で標高44.3m、南端で標高44.0mとなる。また、溝の底面には幅0.3～0.5m、深さ0.1mの溝が南北方向に掘られている。溝の埋土には水が流れた様子はなく、一気に埋められている。近世の瓦の小片が出土する。溝122の西側では近世の柱穴などがほとんど検出されない事から、この段階の区画施設の可能性も考えられる。

**溝135**(図15、図版5) 1区東側で検出した南北方向の溝。幅1.8～2.0m、深さ1.2～1.4m、南北長は20m以上を測るが、南側は調査区外へと続く。溝底は南側へと低くなる。溝は褐色砂泥などで一時期に埋められるが、断面観察では溝を埋めた後に幅1.2m、深さ0.6mの溝の再掘削が行われている事が確認できる。平安京・京都土器編年XIII～XIV期の土器類が出土した。

註

- 1) 火山灰の同定は、(株)フィッシュン・トラックの檀原 徹氏による種々の分析の結果である。檀原氏からは様々なご教示を得た。記して感謝いたします。
- 2) 土器類の年代観は以下の文献による。  
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

## 4. 遺 物

遺物は、平安時代・室町時代・江戸時代の土器・瓦類が出土している。時期的に最も多いのが平安時代、次に江戸時代、室町時代となる。平安時代の遺物は、9世紀前半のものが最も多く、これ以降のものはほとんど出土しない。室町時代の遺物は溝69などから小片が少量出土する。江戸時代は17世紀の前半と18世紀後半の土器・瓦類が出土する。

### (1) 土器類 (図16・17、図版6・7)

#### 平安時代の土器類

**溝110出土土器** 平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。1～3は土師器皿Aである。1・2の外面口縁部はヨコナデ、3は外面にヘラケズリを施す。1～3のいずれも口縁端部を摘み上げる。4・5は土師器椀A。4は磨滅のために調整は不明である。5は外面口縁部にヨコナデを施す。4・5いずれも口縁端部を摘み上げる。6・7は須恵器。6は須恵器杯A、焼成はやや軟質で胎土に0.5mm程度の白色粒と灰色粒を多く含む。7は須恵器杯Bである。溝110の出土土器類の時期は、平安京・京都土器編年Ⅰ期新～Ⅱ期古<sup>1)</sup>である。

**土坑84出土土器** 平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。黒色土器は出土しない。8～11は土師器皿Aである。いずれも外面はヘラケズリを施し、口縁端部を摘み上げる。12は土師器杯A、平底の底部から体部は直線的に立ち上がる。体部外面はヘラケズリを施す。13～18は土師器椀Aである。体部は丸味を持って立ち上がる。口縁端部は、小さく摘みあげる15・16と丸く収める13・14・17・18がある。外面調整は、15・16は磨滅のために不明であるが、他はヘラケズリを施す。19～23は須恵器である。19・20は須恵器杯蓋、いずれも平坦な天井部と屈曲する口縁部からなる。21は須恵器壺蓋、天井部は平坦で口縁部は内傾しながら折れ曲がり、口縁端部は面を持つ。23は大型の須恵器甕、頸部は「く」の字状に短く立ち上がる。口縁端部は下端が突出し幅広の面を

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
長岡京期	軒平瓦		軒平瓦1点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦、緑釉平瓦		土師器26点、須恵器9点		
室町時代	土師器、青磁				
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、飾瓦、棧瓦、硯、銅製品、銭貨		土師器13点、染付8点、施釉陶器2点、軒丸瓦1点、軒平瓦3点、飾瓦1点、硯1点、銅製品1点		
合計		31箱	66点(7箱)	1箱	23箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

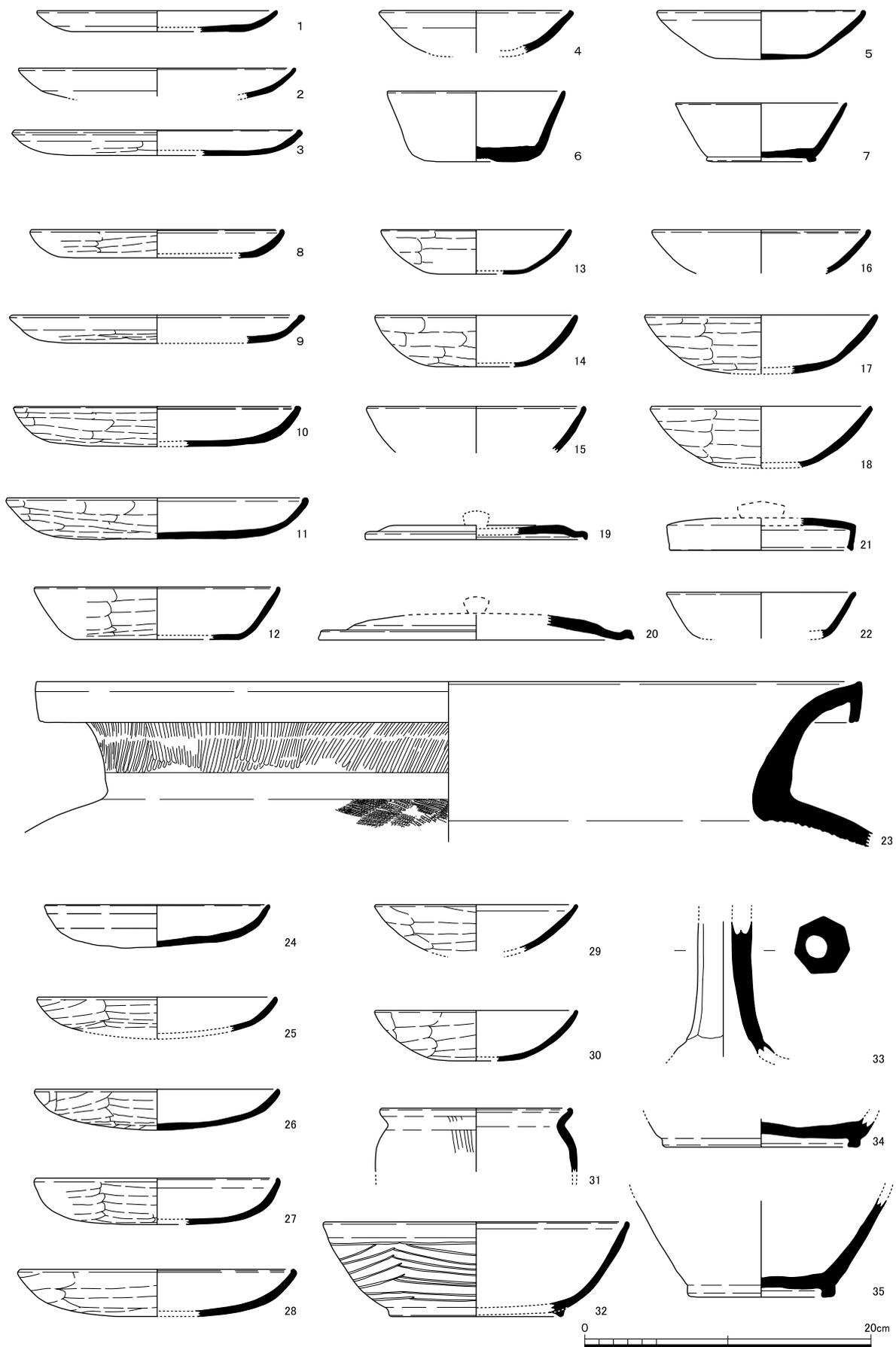


图16 土坑84·186、沟110出土土器实测图（1：4）

表4 土坑84出土土器類構成表

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・碗・皿	779	93.3
	高杯	2	0.2
	甕・鍋	54	6.5
	小計	835	100.0
須恵器	杯・碗・皿	18	43.9
	壺	17	41.5
	甕・大型壺	6	14.6
	小計	41	100.0
合計		876	100.0

なす。外面体部には格子目タタキ、頸部には平行タタキ痕跡が残る。土坑84の出土土器類の時期は、平安京・京都土器編年I期中である。

**土坑186出土土器** 平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。これ以外の土器類は出土しない。24～33は土師器である。24～28は土師器皿Aである。24は平坦な底部から口縁部はやや丸味を持って立ち上

がる。外面調整は磨滅のために不明である。25～28の外面はいずれもヘラケズリを施す。口縁端部は丸く収める24～26と僅かに摘みあげる27・28がある。29・30は土師器碗である。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。体部外面はヘラケズリを施す。31は土師器甕である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は肥厚する。体部外面には縦方向のハケメを施す。外面は被熱し赤色に変色する。33は土師器高杯の脚部である。杯部・裾部伴に欠損する。断面は七角形を呈する。34～35は須恵器である。34は須恵器杯Bの底部である。内面底部は使用によって滑らかになっているが、調整時のナデ痕跡は残る。35は須恵器壺の底部である。土坑186の出土土器類の時期は、平安京・京都土器編年I期中である。

### 江戸時代の土器類

**土坑81出土土器** 36～40は土師器皿である。平坦な底部から口縁部は外反しながら立ち上がる。

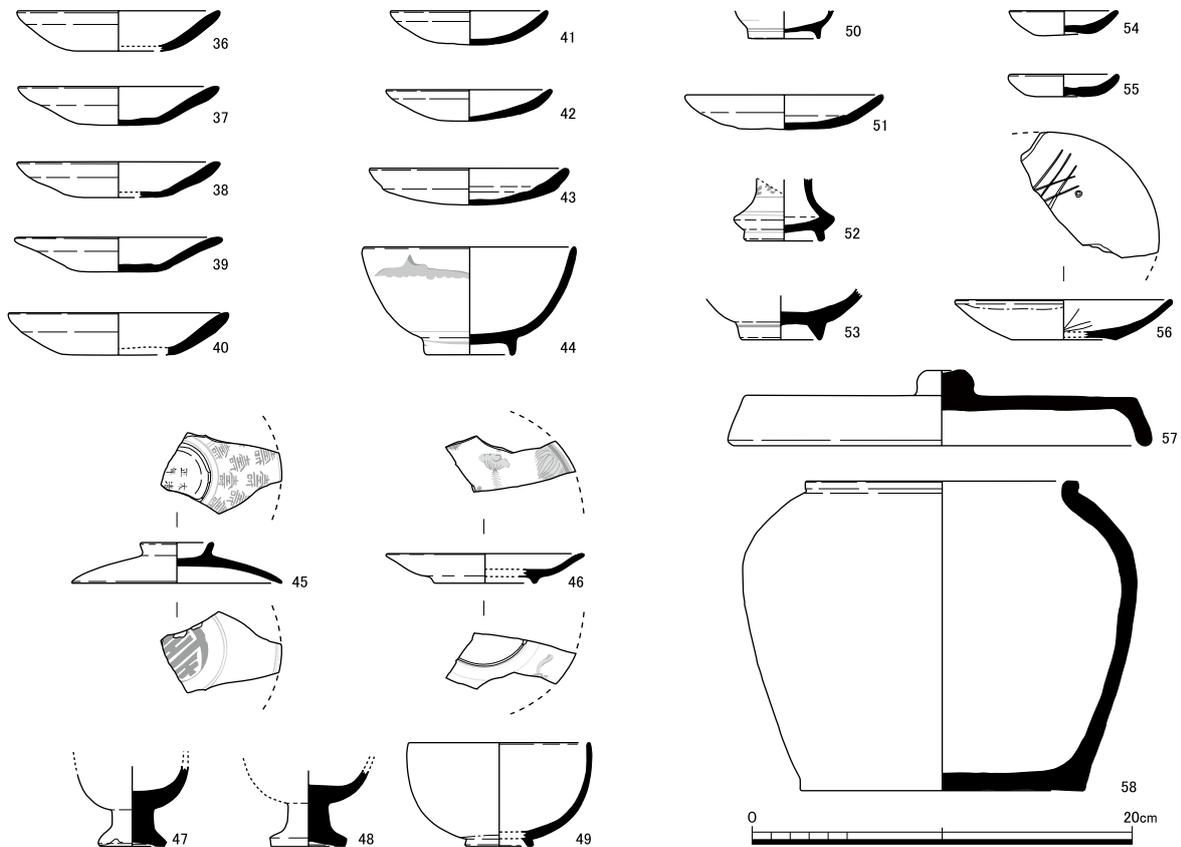


図17 土坑36・81・92・100・213・295、溝135出土土器実測図(1:4)

色調はいずれも淡い赤褐色を呈する。36・38・39には口縁部に煤が付着する。土坑81の出土土器類の時期は平安京・京都土器編年Ⅺ期中である。

土坑92出土土器 41~43は土師器皿、色調はいずれも白灰色を呈し、口縁部に煤が付着するものはない。43は器壁が厚く、形状は均整を欠き内面は凹凸が著しく、洛中で出土する土師器皿とは異なる点が多い。44は伊万里染付の椀である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は丸く収まる。高台畳付きには離れ砂が付着する。土坑92の出土土器類の時期は平安京・京都土器編年Ⅻ期である。

土坑213出土土器 45・46は伊万里染付である。45は蓋、内面底部に「寿」を、外面口縁部には多数の「寿」と外面底部に「大清正年」の文字を描く。46は皿。45・46ともに高台畳付け部を除き全面施釉する。釉薬は透明感が強い。胎土は精良である。同時期の伊万里染付の中でも精製品である。47・48は仏飯器、いずれも杯部上半を欠損する。脚部底部は無釉である。49は京焼・信楽系施釉陶器の丸椀である。外面底部以外に透明の釉を施釉する。土坑213出土土器類の時期は平安京・京都土器編年Ⅻ期である。

土坑36出土土器 50は伊万里染付の小椀である。高台畳付け部を除き全面施釉する。釉薬は透明感が強く胎土は精良である。同時期の伊万里染付の中でも精製品である。51は白色系の土師器皿である。口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部は丸く収まる。内面の圈線は底部よりもやや上に施される。土坑36の出土土器類の時期は平安京・京都土器編年Ⅻ期である。

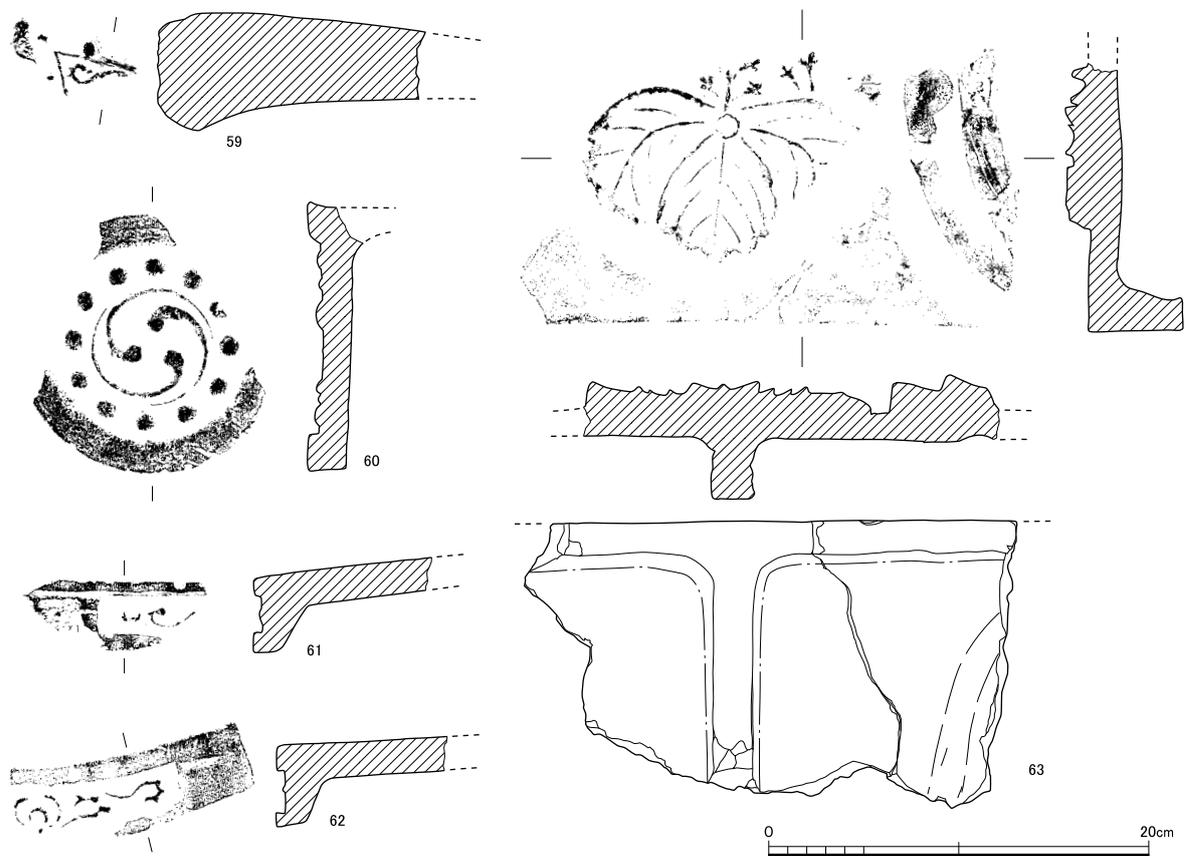


図18 瓦拓影・実測図（1：4）

溝135出土土器 52・53は伊万里染付である。52は瓶の底部、53は椀底部である。いずれも高台壘付きに離れ砂が付着する。溝135の出土土器類の時期は平安京・京都土器編年Ⅻ～ⅩⅣ期と考えられる。

土坑295出土土器 54・55は赤色系の小型土師器皿。56は京・信楽系陶器の灯明皿、鈍い灰色の釉薬を外表面口縁部から内面に施釉する。57は土師器の蓋、いわゆる火消し壺の蓋である。天井部内面はナデが施されるが、外面は未調整である。土坑295の出土土器類の時期は、平安京・京都土器編年ⅩⅣ期と考えられる。

土坑100出土土器 58は土師器の壺、いわゆる火消し壺である。内面と外面下半部はナデ、外面上半部はヘラ状工具による横方向のナデを施す。

## (2) 瓦類 (図18、図版7)

59は柱穴220より出土した長岡宮7757A式の軒平瓦。全体に磨滅が激しく調整は不明。胎土には0.1～0.5mmの白色粒を多く含み、焼成は軟質である。60～63は江戸時代の瓦。いずれも土坑213より出土した。土坑213からはこれらの瓦の他に多量の棧瓦が出土した。60は巴文軒丸瓦、61は平瓦部には反りがない板塀瓦である。62は唐草文軒平瓦。63は五七桐文を配する飾り瓦。桐文の右側の文様は欠損のため、詳細は不明である。

## (3) その他の遺物 (図19、図版7)

64は溝112から出土した須恵質の円盤状土製品。直径3.9cmを測る。凸面の外周には浅く細い溝が円形に巡り、長さ4～6mm、幅1mmの刺突状の圧痕と径2×5mmの穴が穿たれる。穴は凸面側から穿たれている。凸面はナデ、凹面は指頭圧痕が残る。須恵器壺製作途中において頸部穿孔時に生じた円盤粘土を加工して焼成した土製品と考えられる。

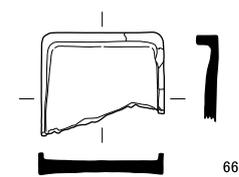
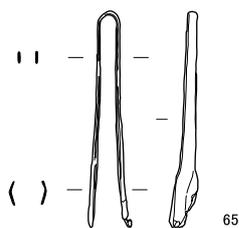
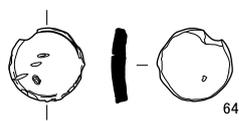


図19 土製品・金属製品  
・石製品実測図 (1 : 4)

65は土坑92から出土した銅製の鑷子 (ピンセット)。長さ11.5cm、幅は中央の折り曲げ部で5mm、先端部の最も広い部分で12mmを測る。先端の形状は幅広く板状になっており、過半を内側に屈曲させる。

66は溝135から出土した硯。陸部は欠損し、横6.5cm、縦5.5cmを測る。形状は隅部が丸味を持つ長方形を呈するとみられる。色調は褐灰色である。

### 註

1) 土器類の年代観は以下の文献による。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」  
『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

## 5. まとめ

今回の調査で検出した主な遺構・遺物は時代別にみると、平安時代前期と江戸時代のものになる。中世の遺構は室町時代の溝69のみである。溝69はその規模から耕作に伴う用水路と思われるが、これ以外の遺構がなく詳細は不明である。ここでは、平安時代の造酒司の東限施設に関わる問題と江戸時代の遺構の性格についてまとめてみたい。

### (1) 造酒司東限築地について (図20・21)

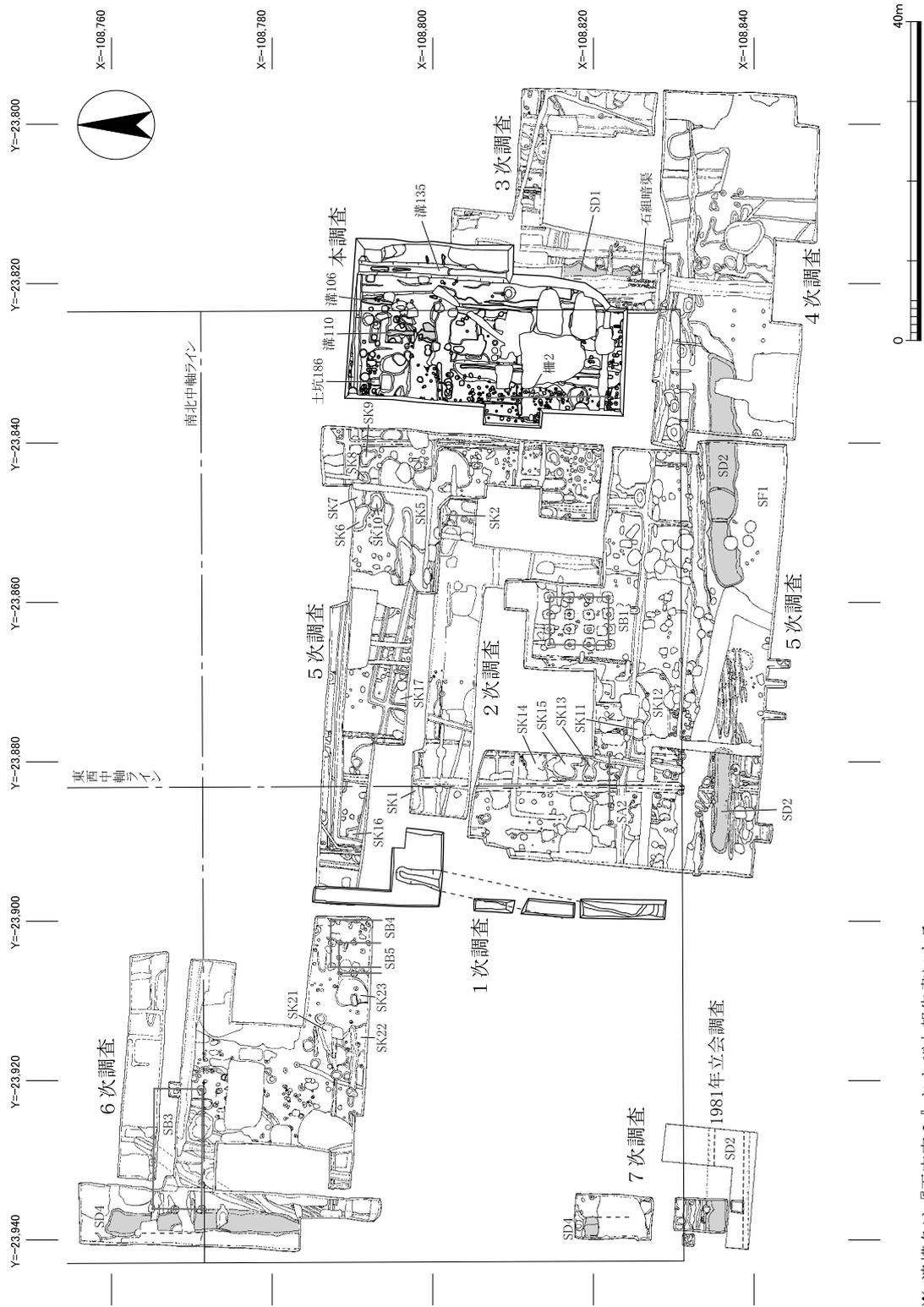
溝110は造酒司の東限築地の内溝と考えられる。しかし、幅0.3～0.7m、深さ0.1～0.2m、検出長は6.0mと、その一部しか遺存していなかったため、その妥当性について考えてみたい。

造酒司3次調査では、東限築地外溝と考えられる南北方向の溝SD1が検出されている。このSD1は、溝の西肩が近世の溝によって失われており、本来の溝幅は不明であるが、遺存部分だけでも幅1.5～2.0mを測る。過去の調査で検出された造酒司の外郭施設に関連する遺構としては、4・5次調査の南限築地の外溝(幅3.0～5.5m)、6次調査の西限築地内溝(幅3.0m)がある。いずれも築地に伴う溝としては規模が大きい事が特徴である。SD1もこれらに近い規模を持っていた可能性がある。

3次調査SD1の西端は座標値では $Y = -23,819.5$ であり、今回検出された溝110の東肩は $Y = -23,826.0$ となっており、この間には約6.5mの距離がある。ただし、これまでの調査で確認されている造酒司の築地に伴う溝の幅は3.0～5.5mあり、溝110と3次調査SD1がこれと同程度の規模を持つとすると、6.5mの距離はこれよりも小さくなることになり、この間に築地と犬走りが存在したとすれば、その関係には妥当性があるものと考えられる。

ここで宮内官衙の築地の規模(築地と犬走りを合わせた幅)について述べてみたい。宮内官衙跡の発掘調査によって築地規模が確認されているものとして、太政官西限築地が幅4.5m・北限築地が幅2.5m、中務省の西限築地が幅5.0m、民部省の南限と西限築地の4.2mなどがある<sup>1)</sup>。陽明文庫の『宮城図』には宮内道路の幅についての記載がある。豊楽院西側の宮内道路は幅10丈。中務省西側の宮内道路は幅9丈。民部省南側の宮内道路が幅10丈、西側の宮内道路が幅9丈となっている。以上の道路幅は、京内道路では一般の大路(幅8丈)よりも幅が広く、宮門大路(幅10丈)と同じか、それよりもやや狭い規模を持っている。『延喜式』における京内大路の築地規模は、道路幅8丈・10丈ともに幅16尺(4.8m)である。先に挙げた宮内官衙における築地遺構の検出例をみると、宮内官衙の築地規模は、それが面する宮内道路が大路規模である場合、京内大路の築地規模に準じていたと考えられる。

『宮城図』によると造酒司の東側には、皇嘉門大路の延長上に位置する宮内道路が存在する。この宮内道路は幅10丈と記されており、造酒司東限築地の幅も16尺(4.8m)であったと考えられる。溝110と3次調査SD1の間には6.5mの距離があるが、先述したように、造酒司外郭築地に伴う溝は大きく、仮に溝106とSD1のそれぞれの溝幅が2m程度であったとすると、両者の距離は4.5m



※ 遺構名は『平安宮Ⅰ』および本報告書による。

図20 造酒司跡遺構平面図 (1 : 800)

となり、築地規模としては妥当なものとなる。

東限築地内溝である溝110と、これまでの調査で確認されている造酒司築地に伴う溝である東限築地の外溝（SD 1）、南限築地の外溝（SD 2）、西限築地の内溝（SD 4）はいずれも9世紀の前半（I期中～新）に埋没する。発掘調査では9世紀後半の遺構・遺物も検出されており、少なくともこの時期まで、造酒司はこの地で存続していたと考えられるが、築地に伴う溝がこの時期に埋没する事に疑問が残る。

中務省の調査でも外郭築地の溝が9世紀前半に埋没する例が報告されている<sup>2)</sup>。9世紀の前半に、宮内官衙の外郭施設の在り方に何らかの変動が存在した事が想像されるが、今後の意識的な調査と事例の増加を待ちたい<sup>3)</sup>。

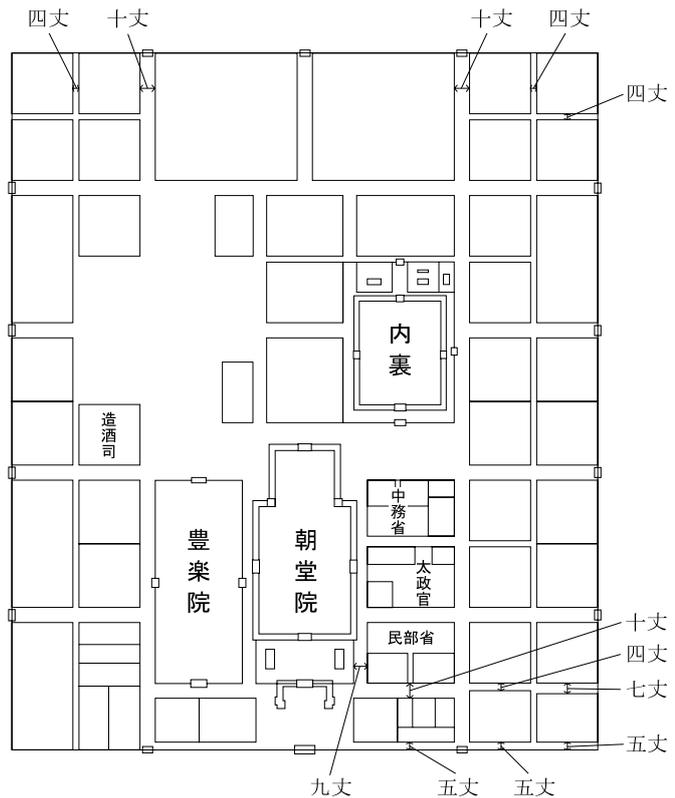


図21 『宮城図』に記された宮内道路の中員

## (2) 江戸時代の調査地について (図20・22・23)

江戸時代の遺構は、17世紀前半の遺構としては土取り穴と考えられる土坑81があるが、この他はすべて18・19世紀代のものである。18世紀以降にこの地の土地利用が活発化した状況がうかがえる。

溝135は幅1.8～2.0m、深さ1.2～1.4mを測る大溝である。その規模から、調査地周辺の耕作地化が進んだ段階で整備された、用水網の基幹となる水路と思われる。溝の開鑿は18世紀代の土坑134の埋没後に行われている。天保2年（1831）に刊行された『改正京町絵図細見大成』（以下『絵図』）の調査地付近をみると南北に流れる水路が描かれており、この溝135に相当するものと思われる。また『絵図』によると、

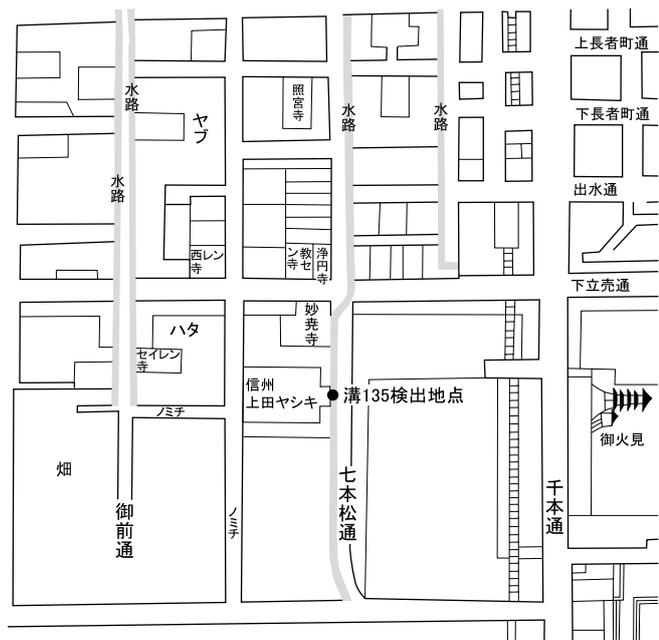


図22 『改正京町絵図細見大成』に記された調査地周辺 (トレース図、一部改編)



図23 3次調査 溝135南延長部と石組暗渠（北から）

調査地は「信州上田やしき」と記されている<sup>4)</sup>。19世紀前半の信州上田は譜代大名の松平氏の領地であるが、土坑213から出土した桐文飾瓦はこの「上田やしき」で使用されていたものである可能性もある。溝135は3次調査でも南延長部が検出されており、溝の一部を埋めて石組暗渠が構築されている。『絵図』では「上田やしき」は東側が七本松通に面して凸型に張り出しており、出入口を想定させる。3次調査の石組暗渠は、この張り出し部

分の出入口に相当する可能性がある。調査地の西側で検出された18世紀以降の柱穴などの遺構も「上田やしき」に関連する遺構である可能性が高い。

以上のように、今回の調査によって造酒司の東限と江戸時代の調査地の土地利用の様子的一端を明らかにする事ができた。造酒司跡は北半部が未調査である。北半部の様相が明らかにされる事と、また宮域における平安時代以降の土地利用が今後の課題といえる。

#### 註

- 1) 『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995
- 2) 9世紀前半に埋没する中務省の築地溝埋没例は、以下のとおり。調査次数および遺構名は、註1文献による。  
調査10：北限築地内溝（溝1）、調査12：北限築地内溝（SD7）、調査13：北限築地外溝（溝3）、調査15：西限築地外溝（溝3）、調査17：北限築地内溝（SD8）、調査19：西限築地外溝（遺構名なし）。
- 3) 造酒司7次調査では、南限築地外溝のSD2と東限築地内溝のSD4が合流しないことが確認されており、SD4は独立した溝である可能性が高い。このような事から、造酒司の各築地に伴う溝の掘削は、宮内道路の排水網が完成される前に行われたもので、築地の溝は雨水を流すものではなく、溜めるものであった可能性もある。
- 4) 『絵図』については京都アスニー長宗繁一氏からご教示を受けた。記して感謝致します。

版 圖

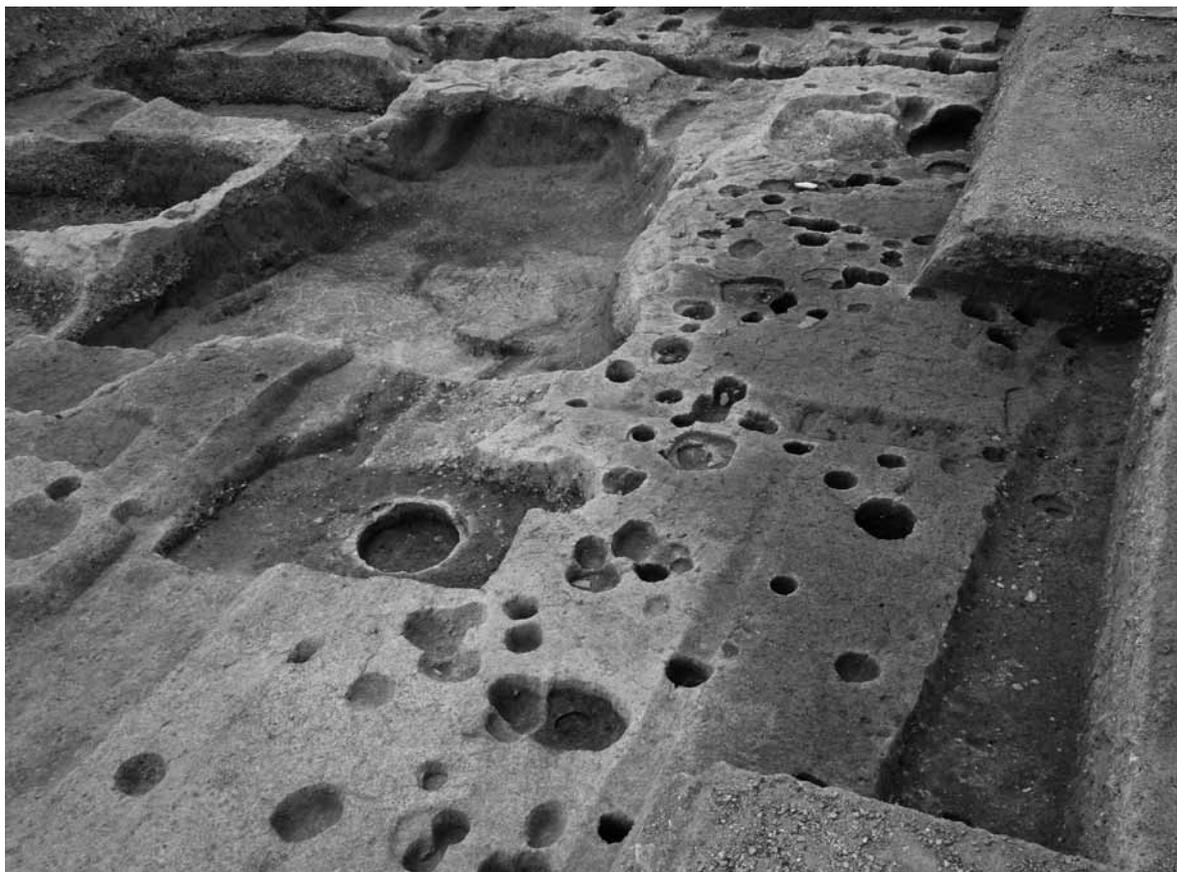




1 1区全景（東から）



2 2区全景（北東から）



1 柵1・2 (北西から)



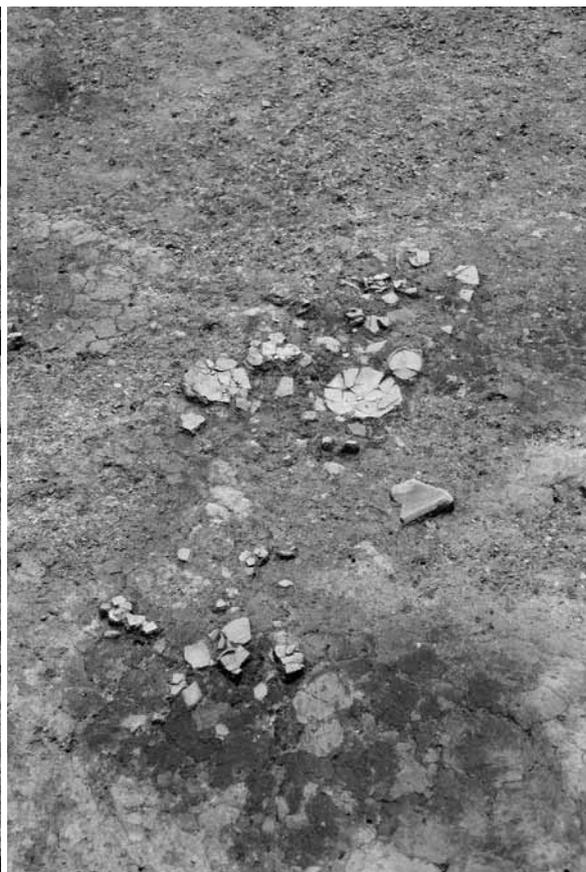
2 柵2柱穴331 (西から)



3 柵2柱穴220 (東から)



1 溝110 (北から)



2 溝110土器出土状況 (北西から)



3 土坑84土器出土状況 (北東から)



4 土坑186断面 (南から)



1 土坑100土器出土状況（南東から）



2 土坑293（北から）



3 土坑92（北から）



4 土坑92遺物出土状況（北から）



1 溝69 (東から)



2 溝112 (北から)

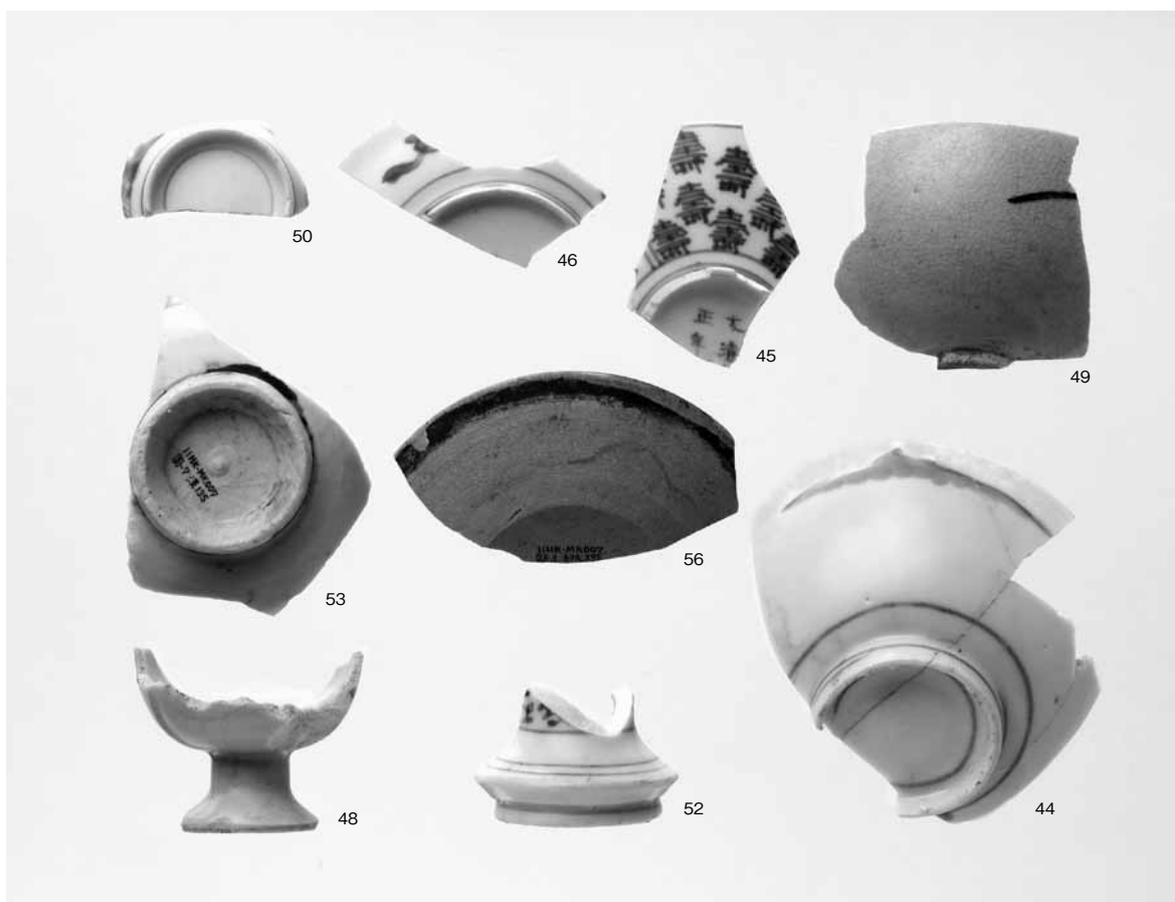


3 溝135 (南から)



4 火山灰層断面 (南から)





# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうみきのつかさあと・ほうずいせいせき							
書名	平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-2							
編著者名	南 孝雄							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡 ほうずいせいせき 鳳瑞遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 じゅらくまわりまつしたちよう 聚楽廻松下町  9番7号	26100	2  236	35度 01分 08秒	135度 44分 20秒	2012年3月 22日～2012 年5月25日	587㎡	病院建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安宮跡  鳳瑞遺跡	宮殿跡  集落跡	平安時代  室町時代  江戸時代	柵、柱穴、土坑、 溝  溝  柵、井戸、土坑、 溝		土師器、須恵器   土師器、染付、施釉陶 器、軒瓦、飾瓦、銅製 品		平安時代前期の造 酒司東限築地内溝 を検出した。	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-2

## 平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡

発行日 2012年7月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961